

---

# **理想のタイプはお義父さま**

江川 歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

理想のタイプはお義父さま

### 【Zコード】

Z9257P

### 【作者名】

江川 歩

### 【あらすじ】

伯爵令嬢レベッカの初恋は5歳の時。大きくなつたら、と約束した侯爵様と念願の結婚式！…の筈が、相手がちがうんですけれど…どうこうこと？

# 1 プロローグ 伯爵令嬢の独白

突然ですが、皆さん、理想のタイプを目の前にしたことはありますか？

私は、あります。

理想が服を着て、目の前を歩いて、喋つたら。  
あなたならどうします？

ちなみに私の場合。

お会いした途端に恋に落ち、即座にラブ アタックを開始しました。  
会つてその日に？と眉をひそめるような悠長で無粋なことはなさ  
らないで欲しいのです。  
だってぐずぐずしていたら、こんなにも素敵な方、すぐに誰かにさ  
らわれてしまう！と必死だったんです。  
なにしろ私の条件が不利でした。

私の不利な条件をお話しする前に、素敵なお方にについてお話しを  
させてください。

お名前はフロスト侯爵。

フロスト卿が父を訪ねていらっしゃった時のことは今でも鮮明に覚  
えてています。

穏やかな物腰、愛情深いお人柄、あたたかな手のひら。

私が一番心惹かれたのは、その瞳。

澄んだ青色の理知的な眼差し。けれども冷たい印象は受けず、むし  
ろ春の日の晴れ渡った空を思わせる。

そして、これが重要なのですが、ふとした瞬間に淋しげな陰がよぎ  
るのです。

これが、イイ！

決定打でしたスリーランホームランですランナーは

- (1) 初恋
- (2) ときめき
- (3) プロポーズ！

ホームベースは「ゴールイン！」ややあー

……失礼しました。

我ながら淋しげな様子に惹かれたのは早熟と言わざるを得ませんが、はつきりと、それとして自覚したのは最近だということ。フロスト卿は、奥様を亡くしていらしたのです。ですから、よぎれる陰は逢うことのかなわぬ奥様への思慕なのでしょう。だからといって私が諦めるかつて？

答えは当然のですよー！

どんなに難攻不落の城であつても、攻めなければ落ちる可能性だってゼロのままなのです。富くじだとして買わねば当たらぬのと回じこと。

ならば私は攻めるのみ！

「うひしゃべれま、うひしゃべれま、わたくしをおよめさんにしてくださいー！」

多少舌足らずになつてしまつたのはお許しいただきたい。  
何せ初めてプロポーズした時は5歳だったのですから。  
初恋、即求婚というノープランぶりは幼やゆえといつておいてください。

ちなみにその時、侯爵様は30歳。

今から思えばまだお若かつた。

勿論今でも若々しくていらっしゃいますけれどね！

ともあれ私の不利な条件、それは出会った時のこの年齢差。こればかりは努力でどうできるものではありません。

けれども人格者である侯爵様は、幼子の戯言として鼻で笑うようなことはなさいませんでした。

大きくてあたたかな手のひらを私の頭に乗せて、やさしくなでてくださり、

「ふふ、情熱的だね、レベッカ嬢。そんなに気に入ってくれたのかい？」

ふわりと微笑まれました。

「はい、ひとめぼれです。だいすきです！ ですからこうしゃくさま、わたくしがおおきくなるまでまつていてくださいませんか？」

「そうだねえ。とても嬉しいお申し出だけれども、結婚となると私一人の考え方で決めてしまえるものではないからね。息子にも聞いてみないと」

「ああ！ そうですね、その通りです侯爵様！」

侯爵様には亡くなつた奥様の忘れ形見、ウイリアム様がいらっしゃいますものね、結婚にご家族の賛同は必要ですよね。私は隣りに立つウイリアム様のほうを向いて

「……ウイリアムさま？」

首を傾げて名前を呼ぶ。

ウイリアム様は、利発そうな少年でした。私と五つ違ったはずですから、当時10歳でしょうか。侯爵様と良く似た色の瞳をこちらに向けてぼそりと

「……大きくなつたら。」

と答えてくださいました。

！！ 難なくハードル突破です！

喜びに頬を染める私を微笑みながら見つめる侯爵様。

「分かつたよ。ではレベッカ嬢が大人になつて、二人の気持ちが変わつていなかつたら結婚しようね」

それはほんの口約束だつたのかもしれません。

その場にいた私の両親など、全く本気にしていない様子でしたし。けれどもあれから15年。私は負けませんでした！

好き好きだと意思表示をし続けて早幾年。まあ15年ですけれど。長いかもせんが、これから侯爵様とのハッピーライフを思えばなんてことのない年数です。そう！  
こ・れ・か・ら・の！

ふふふふふ、ついに念願の花嫁なのですよ初恋が実るなんて私ものすごく幸せです今日は侯爵様と私の結婚式なんです。どうかあなたも祝つてください私もあなたの幸せを祈ります！

そう思つて緋毛氈の上を歩み、祭壇の前に立ち、誓いの口づけをするべくヴェールを上げられ目の前にある顔が。

どうしてウイリアム様！！！？ ホワイ！

シリカ公国フロスト侯爵の嫡男、ウイリアムはさめた子供だった。

彼は早くに母親を亡くし片親で育つたが、淋しがって泣くようなこともなく、淡々と日々を過ごした。

だからといって冷淡な性格かといえば、そういうわけでもないよう

で、父親が亡き妻を想い涙するような時は傍にいて慰めたし、屋敷の敷地内に迷い込んだ動物などは率先してかわいがった。

ただ、特に愛情を注いでいるように見えるのが不細工な犬、というところが少々気になるところではあったが。

何事もそつなくこなし、淡泊な子供。

それがウイリアムに対する大人たちの見解だった。

そんなウイリアムが、サニー伯爵家を、父であるフロスト卿と共に訪れたのは10歳の時である。

母が好きだった珍しい花を、サニー家が育てているのだと聞いた父が、栽培方法や入手方法を聞くために約束をとりつけたのだ。花の名はブウゲンビリヤ。

南国の鮮やかな彩りは、北国であるシリカにおいては普通に見られるものではなく、サニー家でも特別に温室を設えて栽培しているのだった。

(……違う国に来たみたいだ)

案内された温室でウイリアムは思う。

想像していたよりもずっと規模が大きい。ウイリアムの知るブウゲンビリヤは上品な鉢に植えられた小振りな植物だが、目の前にある花々は天井に届くほどに生い茂る木の花だ。色も、見たことのある鮮やかな朱色だけでなく、上品なぼかしの入った桃色、オレンジ色、わずかに薄荷色がかかった白など、とりどりで、ウイリアムは思わず見入った。

そこに賑やかな気配がやってきた。

目をやると、タンポポ色の髪をした女性と小さな子供の二人連れ。おそらくサニー伯爵夫人と息女であろうとあたりをつけ礼を取る。

「やあ、来たね。こちらへおいで」

サニー卿がにこやかに一人を呼び寄せる。

「フロスト卿、ウイリアム殿、紹介いたします。私の妻のメイベルと娘のレベッカです」

「はじめまして」「ようこそいらっしゃいました」

ふんわりと笑う夫人と好奇心を隠すことなくこちらに興味を向ける子供。

「はじめまして、お目にかかる光榮です。フロスト領を治めておりますトマス・リントンです。こちらが息子のウイリアム」「はじめまして」

フロスト卿が応え、ウイリアムも再度礼を取つた。

するとレベッカが、腕に抱えていたブウゲンビリヤ入りの籠をフロスト卿に差し出す。

「 イハしゃくやま、たいせつなかたのだいすきなおはなだとおもした。これをどうぞ！」

(……おや)

ウイリアムはたつた今紹介された、小さな令嬢に注意を向ける。

(今、「たいせつなかた」と言つたな、この子。「死んだ」とすぐ結びつくような言葉を選ばなかつた。  
偶然か？ それとも、僕の母が他界したこと知らないとか？)

正直、侯爵はいまだに亡くなつた妻を思い出してはすべくめそめするので、ありがたいことではあつた。  
そつと觀察をしていて、「おきれいなかただつたときおもした」と言つてゐるから知つてはいるようだ。  
こんなに小さな子が感心だな、などと思つていて、侯爵が穏やかに微笑んでかがみ込み、レベッカの頭をなでた。

その瞬間のレベッカの表情。

ぱつ、と輝かんばかりの笑顔を浮かべ、明るい金髪も相まって、まるでそこに陽が射したような明るさになる。

(“ サー、” つて家名が「こんなにぴったりな子もないんじゃないのかな）

ウイリアムは無表情なまま釘付けになつた。

(なんだね。田が離せなこと、ずっと見ていたこと)

そのまま見つめ続ける。

レベッカは笑顔に頬を染めるオプションも付けて侯爵を見つめた。  
セツヒテ

「 ジハシヤベラモ、ジハシヤベラモ、わたくしをおよめせにしつ  
くだり…」

爆弾発言をかました。

(んなつー?)

ウイリアムは田を見開く。10年間生きてきてこんな、心臓が跳ね  
上がるようなビックリは初めてだ（胸の痛む驚きにはもう慣れてい  
る）。

しかし田頃の無表情ぶりが功を奏して（？）か、彼が驚いているこ  
とを知るのは当人だけだった。

そんな彼の内心など知らぬレベッカは尚も言葉を続ける。

「ひとめぼれです、だいすきです！　ですからジハシヤベラモ、わ  
たくしがおおきくなるまでまつていてくださいませんか？」

なんという短絡的かつ強引かつ無邪気な申し出か！

お前、僕より年下だうとかこんな猪突猛進な母親を持つ羽田には  
絶対に陥りたくないとかそもそもそもそも彼女の両親はどうして止めない！  
？ とか。

珍しく心中で次々にツッコミを入れるウイリアム。

「やうだねえ。とても嬉しいお申し出だけれども、結婚となると私

一人の考で決めてしまえるものではないからね。  
息子にも聞いてみないと」

侯爵はのん気に答えている。が。

……こ れ は。

(……レベッカ嬢。「誰の」が抜けている。この流れだと父は)

ウイリアムは父親の方に視線を向ける。目が合ってにんまりと微笑まれた。

いいんだよ分かってる 的な。

間違つても自分が求婚されているなんて思つてもいい。  
そんなこととも知らない子供は無邪気にこちらを向いて

「……ウイリアムさま？」

首を傾げた。

(……!)

ウイリアムの心臓が再度跳ね上がる。

なんだこれ！ かわいいな！ ちょっとこれ欲しいんだけど！ いやコレとか人に向かつて言っちゃいけないけどでも首を傾げる角度とか一番可愛がってる犬のチヨンと一緒に！ たまんない！  
そうなると、こには勘違いさせたまま様子を見た方がいいよね？

てなことを一瞬の中に頭の中を巡らせたウイリアム。

「……大きくなつたら。」

ナ語も述語も省いてやがておじいちゃんの返答を口にしたのだった。

哀れレベッカ、君の未来は玉虫色だー。

### 3 印象

16歳のレベッカに、フロスト卿の息子に抱く印象は？ と聞いた  
としたら、

- (1) 背が伸びた
- (2) さらさらしてゐる

といった答えが返ってくるだらう。

人々、観察日記めいてい。

ウイリアム本人が聞いたら、がっくりと肩を落としそうなものだが、  
実際には当人はそのような返答は予想済みだったし、わずかに片方  
の眉を上げることじまつた。

さて、レベッカの回答の内容についてである。

1番目、背が伸びた。

これはまあ、読んで字の「」こと。

十の頃に比べて背が伸びるのは当然だが、成長期に入りあつといふ  
間に父親の背丈を超したウイリアムをレベッカは内心、

- (……見上げるのがたいへん)

と思つていた。

(それを思つと、表情がよく分かるから、お顔の位置が近い侯爵様  
は理想的ね！ 近頃、少しお肉がついていらしたところもイイわ～

和みます、ステキ！ 中肉中背万歳です！）

以下、いかにフロスト卿が素敵なのかを脳内で列挙しつつレベッカは悶えたが、長くなるので省略。  
多分レベッカは、フロスト侯爵ならなんだっていい。

2番田、いらっしゃる。

これは、「あなただけが煌めいて見えるの……」といった心情的なものではなく（それだつたらレベッカにとつて輝いて見えるのは、言つまでもなく父親のほうだ）、純粹に見たまま、配色の話である。頭髪が限りなく銀色に近い。短めに揃えられたプラチナブロンドが、歩く度にさらりと風をはらむ様は、巻き毛でからまりやすい髪質に手を焼くレベッカにすると、イラッとするものであった。

（これつて、もしかして白雪姫に嫉妬する王妃様の気持ち…？ いけないわ、そんな心の狭いことじやあ！ ポジティブに褒めることを考えるよレベッカ！ そうね、「年をとつて白髪が出てきても目立たなくていいと思うわ」コレよ…）

言わない方がマシである。

また、彼が生まれ持つた色彩の他に、このところ身につけている衣服の問題もあった。

近衛兵の制服が装飾過多なのだ。

ウイリアムは、父が貴族員の議長の職に就いていたし、王立学院での成績も優秀であったので、誰もに文官の道へ進むと思われていたが、

「内向きのじばかりをやつていると、人を陥れることを楽しみそ

「うだからやめとく」

と、あつさり筋肉自慢の暑苦しい集団に就職した。

この、進路決定の際の理由は、父であるフロスト侯爵の胸の内のみに留められている。

（相乗効果でキラッキラしてるのよねえ。あれで愛想が良ければもてるんでじょうに、浮いた話ひとつ聞かないし。大丈夫なのかしら）  
余計なお世話なことを考えながら、レベツカが歩いていると前方に思い浮かべていた人物が見えた。

ちなみにここには、城の敷地内、修練場と王立図書館の間である。

「ウイリアム様！」

相手が一人であることを見て声をかけた。

立場的にレベツカから声をあげるのは好ましくない。  
そう思つていつもはそつと手をふるのだが？？そしてウイリアムは必ずそれに気が付くのだが？？その行為が周囲にどう見られているのか、全く気付いていないレベツカである。

「レベツカ」

振り向いてにこりと微笑むと近付いてくる。

（きちんと笑えるのにね。人見知りなんだから  
「訓練は一区切りですか？お疲れさまです」

言つて見上げて異変を発見した。

「―― ウィリアム様、頬に傷が

## 4 夕陽

「ウイリアム様、頬に傷が

レベッカが指摘するが、ウイリアムは、

「ああ、そういうえば訓練中に切りましたね」

「ともなげに言つ。

「そんなことよりレベッカ、この週末の予定はどうなつていますか？  
学院はお休みですが、教授に手伝いを頼まれていたりは？  
もし空いているのなら、私もこの後、非番なんです。送りますから  
我が家にも立ち寄つてはいかがでしよう」

「ぜひ伺わせてくださいありがとウイリアムさん！……じゃなくて！」

ん？ と、ウイリアムが眉を動かす動作で先を促す。

「その傷！ そのご様子だと手当なんてなさつていないのでしょう、  
ああもう！」

思わず手を伸ばすレベッカ。

ウイリアムは自然と屈み込んだ。

細い指が頬に触れる。

目を細めたウイリアムの表情を見て、

「やつぱり痛いんでしょ？！」

憤然としてウイリアムの腕を取ると、ずんずんと引っ張つて歩き出した。

「ど」「へ行くの？」

くすくすと笑い、問いかけるウイリアム。

相変わらず鈍い、と思いながら笑える自分はマゾヒズムに由来めるんじやないか、なんて考えながら。

「医務室です！　何を笑つていらっしゃるんです？」

「いえ、私にも心配してくれる人がいるんだなあって」

「……」

レベッカは、ウイリアムの返答を聞くと、へこやりと困惑した表情を見せた。

「それは……いるでしょ？」

「いますか？」

実はレベッカの攻めどりはほこりなのだ。彼女は致命的に「淋しい人」に弱い。

「勿論です。います。たくさんいます。私もきちんと数に入れてください」

ふ、とウイリアムはやわらかく笑う。

「ええ、一番に」

「一番は侯爵様ですよ、お父様なんですから」

「……」

「……つれない。」

「さあ、行きましょうウイリアム様」

二人は、夕刻の傾きかけた陽の中を医務室に向かった。

(……紅く染まった彼女の頬が)

(夕陽のせいではなく、おれのせいなら良いのに)

## 5 摆れる箱の中で

二頭立ての馬車はフロスト邸に向かう。  
揆れる箱の中でレベッカは。

????? レベッカは、ウイリアムの膝の上にのせられていた。  
いや、正しくは腿の上か。ウイリアムの腕はレベッカを囲い込み、  
しつかりとお腹の前で組まれている。

「……」

いつものことではあったが、最近レベッカは、これがちょっとおかしいのではないかと思い始めていた。

そもそも、始まりは子供のことである。  
レベッカとその両親、フロスト侯爵父子が馬車に同乗したことがあつた。

その際に、レベッカは母親の膝の上にのせてもらつていたのだが、  
これを見たウイリアムが後日、一人きりの時に、

「羨ましい」

と、ぽつりと呟いたのである。  
これを聞いて、

未来の母たる自分が頑張らなければいけない。

レベッカは奮闘した。

したが、いかんせん小さな子供ができる」とは限られているのである。継母への道は険しいのである。五歳の幼児が十歳の児童を膝の上にせようとこうのは十台無理な話だった。

悔しそうに涙を浮かべるレベッカに、

「……そんなつもりじゃなかつたんだけどな」

口元を覆つた手の下で小さく呟くと、ウイリアムはレベッカを膝の上に抱え上げた。

「つ、わっ」

「お母様がしてくれるとみたいにしようとしてくれたの？」

「やう、そうなの、わたしはウイリアムおまのおかあさまになりましたいんだから、できないとへやしいです」

身をよじつてウイリアムの方に顔を向ける。涙がこぼれないよう我慢をしているのか、下唇をぎゅっと噛みしめている。

「負けず嫌いなんだ？」

「やう？ ウイリアムさまはわたくしがきらいになつた？ おひざにだつこをできないから」

「はは、その嫌いじゃないよ」

ウイリアムは人差し指をレベッカの口元へ持つていき、噛みしめた唇をほどかせると、顔を近付け、コシンと額を合わせた。

「膝に抱つこには、体の大きい方が抱えたら良いんだよ。さうりが上でも下でもお母様の抱つこと同じ」

「やうなの？」

「やうだよ」

普段浮かべないような？？いや、チヨンに向かつては浮かべているかもしれない？？笑みを浮かべてウイリアムは言い聞かせる。

「よかつた」

明るい笑みが戻るレベッカ。

「じゃあ、さみしくない？」

聞かれてウイリアムは、ぎゅっとレベッカを抱きしめた。

「うん、ありがとう。これからも、いつもしてくれたら淋しくないよ」「わかりました！」

ちょろい。

レベッカは、基本的に人を疑わない性格だった。それは今でも変わらない。

そんな訳で、少々疑問が頭をもたげてはいるものの、おとなしくウイリアムの膝におさまっているレベッカなのである。

ガタガタと馬車が揺れることに体も揺れる。そろそろ自分の体重のことなども気になるお年頃のレベッカは、居心地が悪そうに身じろぎした。

「あの、ウイリアム様」

「何ですか？」

「私、ウイリアム様の義母になる為の努力は惜しまないつもりでは

あるのですけれど

ぐつ、と腹部に回された腕が締まつた。地味に苦しい。  
大きな揺れもなかつたのに何で?と首を傾げつつ、

「やうやうこの体勢は重くはありませんか?」

俯きがちに告げる。視線は先程きつくなつた、ウイリアムの腕だ。  
なんとかゆるめようと、ぐいぐいと押したり引つ張つたりするが、  
まるで解けない知恵の輪のように外れない。

きゅう、と喉の奥を鳴らして見上げると、よつやく少しじだけゆるん  
だ。

「何を言こ出すかと思えば。貴女が重いなんてことがあると思いま  
すか? こんなに細い腰回りで」

「わやー! なしなし、なしでしょーーー! 自分の体を使って人のウ  
エストサイズを測るのをやーめーーー! 」

慌ててレベッカはウイリアムの腕を外そうとするが、今度はやわら  
かく抱き込まれ、肩口にウイリアムの額がのつた。  
レベッカの頬をさらりとした髪がくすぐる。

「私が淋しくなくなるまでは、ずっとこうしてくれると約束しまし  
たよ」

ぴくり、とレベッカの肩が揺れる。

そんな言い回しだつたつけ?  
知らず眉がハの字に下がつた。

(時々、ウイリアム様は子供みたいになるわね)

苦笑して、

「それじゃあ、私がほんとうにウイリアム様のお義母さまになれるまでですね」

答えた。

なんだか馬車の中の気温が下がったような気がしたが、氣のせいだろう。ソラ陽が落ちると気温は下がるものなのだ。

フロスト邸への道のりは、まだ半分。

## 6 ペリカン

一番星が瞬き、薄闇が天を覆う。がたごとと馬車は進む。窓から見える空の色をレベッカが楽しんでいた、後ろのウイリアムが何やらじそじそした。

振り返ると、丁度、頬の手当てをばがそつとしているヒル。

「何をなさってるんです。いけませんよ」

「いけなくありませんよ。手当てはとてもー（ヒル重複）助かりましたが、これでは田立ち過ぎます。父に、からかいの種を与えるなどごめんです」

「侯爵様は、そんなことなせません」

「貴女の前ではそつかもされませんが」

「えつ、私の前では模範的な紳士でありたいと思つていらっしゃるだなんてそんな！ 侯爵様なら多少の意地悪なお振る舞いだつて受けたてるよう」、女を磨きますのにー」

「（……イヤなスイッチ入っちゃつたな） 略少、で済むと思つているんですか？ あれで随分な狸ですよ」

「それは忠告なんですか？ それともその手当てをばがしたいが為の方便？」

レベッカの手はウイリアムの手を阻んでいる。まっすぐな視線を向けられてウイリアムは苦笑した。

「…… 方便です」

「ふつ、と息をつく。

「ですがお願いです。血もとじて止まっていますし、大げさにした

くない」

今度はレベッカがため息をついた。

「本当にそつなさりたいのなら、私がどうこう言ひ方ではないの  
でしょう。でも知りませんよ？」跡が残つても

「残つたら嫌われてしまつかな」

「どなたに？」

「あなたに」

「まつ、ここで言ひことを聞いてくれなかつたからつて、ずっと不  
満を引きずるほど私、心は狭くないつもりです！」

傷が残つた容姿を嫌うのか、という質問の趣旨を、全く思いもして  
いない返答にウイリアムは淡く笑う。

「それでは、ここは我を通させてくださいね」

ペチリとおでこを叩かれレベッカの了承と取る。

頬の傷を外気に晒したところで馬車はフロスト邸に到着した。

\* \* \* \* \*

広いホールで使用人たちに出迎えられた後、一人は応接室に落ち着  
いた。  
程なくしてフロスト卿がやつてくる。

「いらっしゃいレベッカ。変わりはないかな？　お帰り、ウイリア

ム

「侯爵様——！」

飛びついて行きかねないレベッカを、すかさず捕まえるウイリアム。

「ただいま帰りました」

すぐ脇でレベッカのテンションは急上昇だ。

「侯爵様、侯爵様、一週間ぶりにお会いでできて私どつても嬉しいです！ 私に変わりはありませんけれど、侯爵様は少ししふっくらなさったのではありますか？」

すり抜けでフロスト卿のすぐ近くまで行つてしまつた。

「おや、分かるかい？ 近頃、食事が美味しくてね。新しく屋敷に来た料理人が、とても腕が良いんだよ。あまり食べ過ぎると、薬学も勉強中のレベッカにはおこられてしまうかな」「おこるだなんて、そんな！ 美味しく食事ができるのは良いことですわ。過ぎた量でないのなら、むしろぽつちやりなさるのも素敵です」

ぽつ、と頬を赤らめるレベッカ。

「それで、あの、侯爵様。もしお許しいただけるのでしたら、お腹に触れさせてはいただけませんかしら」

ぶつ、と吹き出したのは父子同時だったが、意味合いはそれぞれ異なつた。

侯爵は笑いをこらえながら、

「エリザベス」

と、許可を出した。

？？？？  
エリザベス。

上質な衣服の下の贅肉が揺れる。

「さやあ、出始めのお腹ですね、気持ち良いです！」

「わうかい？ これを褒められるとは思わなかつたから照れるなあ

ハハハ」

……何だろいの、お花の飛んできそうな会話は。

ウイリアムはそつとこめかみを押された。

花といつても、薔薇や百合ではない。  
頭の上に咲くチヨーリップだ。

(…………羨ましくなんてないんだからな)

エリザベスのシントンのみんなじと、ひとづりが。

？？？？たとえ羨ましかつたとしても、ウイリアムの性格では無理な会話だった。

閑話　酒場にて

「直接触らせていただいたら、しつとつペペとするんですかしら……」

フロスト卿と一人で、きやつきやと戯れた挙げ句に、聞きよつじよつては際どい発言をする令嬢。ぱうのとなつて咳くしゃベックに向かつて、

「老人は水分が抜けてくるから、カサカサしますよ」

憎まれ口をたたき、すっかりへソを曲げられたウイリアムである。おかげで、一人で帰る！と送られてもらえず（勿論、使用人は付けた）、今は悪友を呼び出して街の酒場でくだを巻いている。

「代わりにならうなところといえば臀部か……」

目が据わっている。悪い酒だ。友人は思いつきり眉をしかめた。

「……やめろよ？ ほんとにやめろよ！？ 無念かもしねないが、お前の体のどこにも中年男性の腹の感触に相当する部位はないからな！？」

「なぜそんなことが言い切れる！？ 試してみなければ分からぬだろう！」

「誰がどうやって試すんだ！ 落ち着け！ その、とりあえずやつてみよう な考え方、所属組織に毒されてきたんじゃないのか！？」

ちなみに近衛隊で一番良く使われている掛け声は、「ジークマッシュル！」である。

神殿に仕えるこの友人にとっては理解し難い団体であった。

「ほり、押してダメなら引いてみる、って言つじやないか。お前も少しば引いてみたら?」

「それは相手が押されている」とに気付いていなければ意味がないんじゃないのか

「あ、そつか

あつさり頷かれるのも癪に触るが、事実なので仕方がない。

「……見てろよ」

「ウイリアムウイリアム、それ負けフラグだから」

「旗は倒すためにある。その内お前にも協力してもらつからな

「何をですかー！」

ぎやあ、と慌てる声も喧噪に飲み込まれ、夜は更けてゆく。  
転がる酒瓶の数はまだまだ増えそうだった。

## 7 八角形の砦

大陸の北に位置するシリカ公国の中でも、一つの砦に囲まれている。この砦の内側にそびえるのは城。

ここで王族が暮らし、貴族院が開かれる。

この砦を中心にして、幾回りか大きく囲んでいるのが一の砦。この区域に、王立の図書館や学院、練兵場など主要な施設が建ち並ぶ。ここを5-1区域と呼ぶ。

砦は正八角形を描いており、儀式や呪術めいたものを思わせるが、これは砦を築いた4代前の城主が、伝説の大ダコに並々ならぬ執心を示していたことに由来する。

曰く、

「膨らんだ大ダコが飛来して、砦」と上空へ連れて行つてくれるぞ！」

タコの足一本につき、引っ掛ける為の角がひとつらしい。家臣たちは内心、

(……例えばタコが砦に足を掛け、上空に浮き上がったとしてだ。  
持ち上るのは、砦 だけじゃね？)

と、思つたが、これ以外の面では文句のない王だったでの曖昧な笑顔でスルーした。砦はあるに越したことはなかつたからだ。王が心待ちにする大ダコ？？「灰色さん」と彼は呼んでいたが？？は、今も一向に訪れる気配はない。

さて、この砦の中にある王立学院に現在、籍を置いているレベッ

力である。

王立といつだけあって、優秀な人材が集まる学府は入学の競争率も高かつたけれど、将来、侯爵の手伝いができるたら、

「惚れ直してしまったよマイスウェイート」

「ダーリンの為なら、このくらい『屁のカツパ』よ」

……というような、めぐるめぐ甘いひと時が訪れるのではないから夢想して頑張つた。

レベッカの脳内では、しょっ中このよつた妄想小芝居が繰り広げられていくが、なかなか実現しないのが悩みの種だ。

ちなみに、貴族の子女が「屁のカツパ」などという言い回しを口にするのはあまり、いや、まずないことだが、学院は実力主義であり、貴族の令嬢などはほとんど在籍していないことから、段々と今までにない語彙が増えた。

ふわふわとお陽さま色の髪を揺らし、春の妖精のよつだと囁かれる容姿で「屁のカツパ」。

シユールである。

ただでさえ女子の少ない学院なのに、男子の夢を壊さないで欲しい……、とは級友たちの弁である。

ともあれ、学院内では相手が誰であろうと、過剰な装飾を施した言葉遣いはしない。そんな暗黙の了解があるのは事実だ。

「……」自分の講義はどうなさいたんですか？ ヒューバート殿下  
「やだな、レベッカ。殿下はなしで、つてお願ひしたよね？」

？？それが、この場合当てはまるのか。

教室で隣りに陣取り、満面の笑みを浮かべる相手に困惑中のレベッカである。

につこりなのがにんまりなのか、口を弓形にして身を乗り出してき

た。

「バーツで呼んで？」

そんなこと言わわれても。

自分のことを愛称で呼べ、と自分の真横でにこやかにねだる青年に  
対して、レベッカは心中で異を唱えた。

彼の名は、ヒュー・バーント・エンファシス＝シリカ。

この国の第一王子である。

王立学院の最終学年に籍を置き、成績も優秀、名君の素質ありと評  
判の王子。

? ? の、筈、なのだが。

少し前から、この王子が妙にレベッカに構うのだ。訳が分からぬ。  
今も、たれ目がちの甘い目元をゆるませながら、

ぱつちーん

……音が出そうなウインクを寄越した。フェロモンだだ漏れ。周囲  
でさわさわと声があがる。

「シリカのセクスイープリンスが」降臨なさつたぞ！」

「オレもあやかりてえー！」

「キャーッ、プリンス～ウ！ 抱いてーッ」

やかましい。

君たちは今が授業中だと分かつているのかな?  
年若い教授はため息をつく。

一方、レベッカはといえば、

(これも何か私の知らない作法だつたりする?)

最近まで手のひらを上に向けてくい、と指を曲げる仕草の意味も知らなかつたほどである。首を傾げて、

ぱっちん。

ワインクを返した。

ヒューバートは、目をぱちくりと瞬かせた後、片手で顔を覆つてしまつた。

「うわつ、やるなあレベッカ嬢!」

「セクスイーフェロモン効いてねー! つづーか王子撃沈?」

「伊達にリントン先輩の胸焼けしそうなラブ ビームを浴び慣れてねーな!」

「てことは、ラブ ビーム > セクスイーフェロモン? うおお

ウイリアム先輩すげえっス、オレ先輩について行くー!」

ひそひそ。

もう、さあ。君たちさあ。

教授は肩を落とす。「僕は授業がしたいなあ……」

「教授」

通る声が壇上の人物を呼ぶ。

「サニー嬢をお借りしても?」

「はい、どうぞ殿下」

「待つてください先生! 今は授業中ですよ? それに殿下

「ヒュー」

「……ヒュー先輩。私を連れて行つてどうなさるんですか」「実験の助手をお願いしようと思つて」

それを聞いた途端に、レベッカの目が輝く。植物を医学的に有効に利用するためのヒューバートの研究は、レベッカが今後進みたい道でもあつたので。ちなみに、新しい薬効を発見して、権利料をフロスト侯爵に使つてもらうのが彼女の数多ある夢の内のひとつだ。意外なことに、いつもの妄想小芝居よりは実現性は高い。

結局、王子の後について教室を出た。

\* \* \* \* \*

二人は石畳の回廊を歩く。

「授業を抜けたこと、フロスト侯爵様に伝わつたりしませんよね?」「口止めしとくよ」

ヒューバートは、レベッカが恋人の親の心証まで気にかけるほど、ウイリアムとの仲は進んでいるのか、と考えた。

(征服しがいがありそうだ)

吾輩は王子である。名前はまだない。

……冗談だ。先日読んだ、東洋の小説を気取つてみた。  
実際には、ヒューバート・エンファシス＝シリカという。  
「薔薇の似合<sup>ハナシマツ</sup>つチャーミングなあなた」って呼んでくれても良いよ?  
なんだいその溜め息は。ハハハ、私に見惚れたんだね、光栄だ。

というような芸風で日々を過ぎ<sup>ハヤフク</sup>している。

最初は冗談のつもりだったのが、最近は板に付き過ぎて自分でも違和感がない。元々持っていた素質なのかも知れない。

そして、この振る舞いで、随分と生きやすくなつた。  
自分が人よりも多少出来が良いのは自覚しているが、それを良く思わない者もいる。まあ、そんな奴は早晚失脚させてやるつもりではあるが、現時点での私の手駒はあまりにも少ない。

そんな中で、ぜひとも手に入れたいと思う人材があつた。

貴族院の狸の一粒種、ウイリアム・リントン。

学院で一学年上に在籍していたので、能力や人柄、周囲からの評価も分かっていたし、自分と年齢が近いのも都合が良いと思つた。  
だから、誘つたのだ。

将来、私の補佐となることを見据えた進路を選んではくれないか、  
と。

つまりは政務に携わる部署で力を付けて欲しいという意味だったの  
だが、それをおいつは!

「興味がないので」

の、ひと言で断りやがった！

温度のない表情で、しれつと…

「君主制のこの国において、その言葉は随分と勇気があるんじゃな  
いか？」

言ひてやると、奴はヒュハイ、と眉を上げ、

「ああ、申し訳ありません。言葉が足りませんでした。正確には、  
陰謀の渦中に身を置いて權謀術数を喜々として張り巡らす、そ  
ういった自分に興味がありません」

少しも申し訳なくなんて思つていらない表情で言い直した。  
言葉数は増えたが、ちつとも謝意は増えてねー。

「それなら何に興味があるとこつんだ？」

その時のコントンの表情の変化には驚いた。

色も温度も「ひんやり」を絵に描いたような顔に、やわらか  
な色がのる。「雪解けだー、春が来たぞー！」といつ空耳が聞こえ  
たぐらこだ。

しかし、そこまでの変化を見せておきながら、

「秘密です」

奴は教えなかつた。

秘密と答えた時の、ひどく甘つたるい表情と声。  
何が奴をこうも変え得るのか。

気になつて当然だろ？

リントンの卒業した翌年、王立学院に入学してきた少女に興味が湧いたのは、そういうた理由だ。

## 9 グラスガーテン

サニー家の令嬢レベッカは温室育ち。

「って言われているのは知っている?」

そう問い合わせながら、ヒューバートは研究室の扉を開けた。眼前には実験器具で森ができている。

合間に縫つて窓際に近い机まで行き、上着を脱いで白衣を着用する。その際、シャツの前をはだけるのはお約束だ。

「我が家の中は一応、規模が大きな部類に入りますからね。温室の中で遊んだり、勉強したりもしましたから」

「うーん、それってちょっと違うんじゃないかな?」

「大切に育ててもらっていますよ?」

予備の白衣を受け取りながら、レベッカはにこりと微笑む。

(……言葉の中の揶揄を分かつてない、わけではないのかな?)

掴みかねたが、この部屋に同行させた口実を思い出してヒューバートは実験の手順の説明をはじめた。

一方その頃。

「アニキー!」

ウイリアムは覚えのない呼ばれ方で呼び止められていた。振り返り、近付いてくる人物の服装を見て、かすかに眉を寄せた。

「……君は、王立学院の一年生のようだけれど」「ハイ、仰言る通り、王立学院一年在籍、スミスです！上から読んでも下から読んでもスミス、とお見知りおきください」「すぐどうでもいいことを付け足したね、君」「うわあ、ひんやり視線がたまりません先輩！」  
「変な性癖を私に示してくれなくていいんだからねスミス君」「うつはあ凍れます！ サニー嬢への態度との温度差に悶えそうー」「レベッカ？」

ウイリアムの態度が改まる。

聞き流す姿勢から一転して真剣に身を乗り出した。

「レベッカに何か？」「あ、そうです、そうなんです。今、講義中のサニー嬢をヒューバート殿下が研究室へ連れて行かれたんです。王族の研究室って、共同じゃなくて個室でしょう？だから」「！……それをわざわざ私に伝える意味は？」

見返りを求めているのか、と言外に含ませて尋ねる。返ってきた答えは思つてもみないものだつた。

「アニキって呼ばせてもらいたいんです！」  
「……は？」

そういうえば先程もそんな呼ばれ方をしたが。

「色々と斜め上をいく、あのサニー嬢を射止めるリントン先輩つて

すごい！ って僕達憧れていんんです。つていうか尊敬？ リスペクト？

「僕たち？」

「ファンクラブ？ 親衛隊的な……違いますね、そうだ、舍弟です！」

【舍弟】人に対する自分の弟をいう語。他人の弟にもいう。（広辞苑）

『……お兄さまって呼んでもいいですか？』

あらぬ幻聴が脳裏をよぎりてウイリアムはゾッ、とした、が。  
使える者は使うべし。  
一時の背中の寒気がビリビリした！

「呼び名くじい好きにしたらい。教えてくれてありがとう。……

といひで君こそ今は講義中なのは？」

「トイレに行きたいて言つて抜けきました！」

びしつ！ 敬礼！

屈託のない返事に、ウイリアムはこの後の自分の隊長への言い訳は、絶対に腹具合だけは使うまい、と心に決めて踵を返した。

王子と対峙するならば、少々時間をとるだらうと思ったので。

学院の研究棟に足を踏み入れる。

たしか王子の研究室は3階の奥だ。研究棟独特の静けさの中、足早に目的階へと進む。その時、

かしゃん。

遠くで、何かが落ちる音と「きやあ」という声が聞こえた。

(レベッカ！？)

ウイリアムは階段を駆け上がり、廊下の突き当たり、開け放たれた扉を手指した。

木目の美しい扉に手をついて中を見渡す。

「レベッカ！」

視線の先には、こちらに背を向けて床につづくまるレベッカと、その対面にはひざまずいたヒューバート。

ウイリアムは咄嗟に近付くと、レベッカを抱え上げた。振り返る余裕もなく、背後の人物にもたれ掛かる姿勢になつたレベッカは身をよじり仰ぎ見て、

「ウイリアム様」

ふわりと微笑んだ。

しかし、すぐに顔をしかめ、ウイリアムの喉元に手を伸ばすと、

「釦が外れていらっしゃいますよ」

襟元の乱れを正した。

それを見て、胸元まで見えそうなほど襟をくつろがせているヒューバートは目をくるりとさせた。

「レベッカ、私の釦は直してくれないの？」

にんまりと微笑みながら言った。ウイリアムの眉間に皺が寄る。

「殿下、そのようなことをやせらる為にレベッカを連れ出したのでは  
ないでしょ？」

「ん、そうだね」

あつさり引き下げる。

「まぢはガラスを片付けないとね」

「そうでした！　申し訳ありません、器具を割つてしまつて」

レベッカの視線をたどると、足下に壊れた実験器具が散つていた。  
先程の音と悲鳴はこれらしい。

ウイリアムは表情を引き締める。

「殿下にお怪我は」やれこませんか？」

「ないよ。割れた時に近くに居たのはレベッカだけだからね」

「レベッカ、君は？」

「大丈夫よ」

くすり、ヒューバートの口から笑みが漏れる。

(ヒューバートの順番は間違わないんだな。)

サーー嬢への執着を隠さないとはしないが、いざといふ時には王族である自分を優先させる。

そつあうそつとするウイリアムの姿勢にヒューバートは好感を持った。

ガラス片の始末をする為にレベッカが退出している間、部屋はウイリアムとヒューバートの二人きりになった。

「思つたより早かつたな」

「まさか私を呼び出す為にレベッカを利用したのではないでしょうね？」

掌中の珠に触れるなどばかりにウイリアムは気を尖らせる。ヒューバートは苦笑する。

「利用……なのかな。自分が振られた理由を知りたいと思ったら、予想外に興味深い人物だったんだよ」

「紛らわしい言い方をなさらないでくださいませんか。彼女が聞いたら盛大に誤か、」

「ウイリアム様、殿下に想いを寄せられていらっしゃったんですか！？」

あー…

遅かった。レベッカの耳に入ってしまった。  
しかも、

「そうだよレベッカ、リントンに側にいて欲しいと懇願したのに、  
すげなく断られたんだ」

ヒューバートが混ぜつ返す。

またレベッカ呼びか、と、ウイリアムはムツとする。たぶん一番に

「道ならぬ恋はお辛かつたですね」

レベッカは、

「道ならぬ恋はお辛かつたですね」

ヒューバートの手を取っていた。

「レベッカ！」

ベリ、と音が聞こえ、その勢いでウイリアムはレベッカを引き剥がす。

「愛されている者の余裕かい？」

ヒューバートが皮肉気に口の端を歪めると、レベッカはきょとんと目を瞬いた。

「私のことを仰言つているのでしたら、余裕などどこにもありません。どんなに全力でお愛し申し上げたところで、一番にはなれないのですから」

「何だつて！？ そんな罪作りな真似を君は許すのか？」

「許すも許さないも、ひ、ひと目惚れした時点で、きや、言つてしましました、すでに心の中に大切な方を住まわせていらっしゃるのを承知しておりましたもの」

照れますー！

と、頬に手を添えて身悶える令嬢の様子は、言つている内容は高潔かもしけなかつたが、いかんせん見たところが残念だった。とにかく落ち着きがない。だから実験器具を割るよつた事態に陥るのだ。

フロスト侯爵への愛を語り出すとヒートアップするレベッカをよく知っているウイリアムは、ボロが出ない内に、とレベッカの口を手で塞いだ。

「フガ！」

「おいリントン、都合の悪いことは口を塞ぐのか」

「何とでも」

（殿下の言つ “都合の悪いこと” は、おれがレベッカを差し置いて想う人を持つてゐるという解釈だろうけれど）

実際には、レベッカが想いを寄せるのが自分の父親であること。それが知れ渡るのがウイリアムにとつては都合が悪い。幸か不幸かどうこうわけだが、それは世間に認知されぬままであるけれど。

（親子ほど年の離れた相手への想いなど、まま」と扱いが、良くて憧憬と認識されるだらう）

ウイリアムはそう考へてゐる。そして、そうなつた場合にレベッカに群がる虫の数が増えるのは避けたかった。  
何故なら、

（まだおれは手に入れられていない）

レベッカが知つたら憤慨しそうなことを考へてゐる。ウイリアムは自嘲の笑いを漏らした。

レベッカは物ではない。

今、自分の右の手の平に息づかいを感じる、生きて考へる少女だ。けれども考えずにはいられない。

(おれは手に入らないからムキになつてゐるだけではないのか?)  
(手に入つたら興味をなくしたりはしないか?)

今まで幾度も自問したが、答えは出なかつた。この先もまだしばら  
くは出そうにない。癪だけれど。  
それもこれも、

(クソジジイのせいで!)

レベッカがトマス・リントンに熱を上げたまま、下げる気配を見せ  
ないから。

そのことについて考え始めると、むかつ腹が立つてくる。  
あれが10年も想い続ける相手か?

いや、親だけど! 尊敬はしているが! 愛情も勿論持つてゐるが!

(少しばかりも見てみたらどうなんだレベッカ!)

……オマエモナー。

## 11 知らない

「ほりほり」と頭を立てる蒸留装置の向こうで、レベッカとヒューバートが何かの植物の薬効と副作用について話している。

ウイリアムも学院で一般教養としての薬学は学んでいたが、今、目の前で交わされる会話については理解しかねた。

そう、レベッカにはそれだけの知識が既に身についているのだ。おそらくは、独学によつて。

素っ頓狂で思い込みが激しく、世間知らずの気はあるが、彼女には向上心とそれに見合う能力があるとウイリアムは思っている。

あまりそう見えないのであるけれど。

それが主に自分の父に対する想いを原動力にしているのが悔しくはあるけれど。

そして、ふと考える。

レベッカの想いは足し算の想いだ。

相手を想う気持ちで己の能力を高め、そして豊かにしていく。  
比べて自分はどうだろうか。

欠点の芽を削り、嫌われないようにする引き算の想い。

例えば、進路を近衛隊にとつたことだとか。

そこまで考えてウイリアムは、うわ、と口元を覆つて目を伏せた。  
直前にヒューバートに対して放つた言葉を思い出したのだ。

（おれがどれだけのものだつて言つんだ！？）

ちょっと誘われたくらいで、本気で執着されるほど大した人物でもないだろ？、と思うと顔が熱くなるような気がした。

ちなみに、「ちょっと」誘われたと言つてはいるが、これはウイリアムの主觀による「ちょっと」であつて、彼がレベッカに向ける想いの発露も「ちょっと」だ。投げても返つてこない想いのボールはウ

イリアムの感覚を鈍らせていた。

それはさておき。

拳動不審なウイリアムの様子にいち早く気付いたのはレベッカであった。

「ウイリアム様？」

とど、と軽い足音と共に近寄り、下からのぞき込むように見上げると、そつとウイリアムの腕に手をかける。

「『』様子が変ですよ？ 具合でもお悪いのではないですか？」

「ん？ どうしたリンク頓、顔が赤いぞ」

言われてウイリアムは苦笑する。

「分かるほど赤くなっていますか」

そうして、腕にかけられたレベッカの細い指をそつと外すと、両手でレベッカの耳を覆つて塞いだ。

「ひやえっ？」

なんだか変な声を発しているレベッカに、淡く笑いかけてからヒューバートに顔を向けると、

「先程の自分が、絵に描いたような”自信過剰な青一才”だったので恥ずかしくなったんですね」

苦い笑いを重ねた。

それを聞いて首を傾げるヒューバート。

(ああ、殿下も首を傾げる角度がチヨンと一緒に)

せめてレベッカと一緒にいたやれウイリアム。

「何を成したでもない、小器用なだけの自分が貴方に求められて当然という態度でいたので」

その言葉に、ヒューバートは傾けていた頭をまっすぐに直すと今度は半眼になつてウイリアムを見据えた。

「ウイリアム・リントン」

「は」

「私の本気を疑つてもらつたら困るよ」

「……」

「私が欲しいのは、今、完璧な人間ではないよ。共に、より良き道を探せる人間だ。そこを誤解しないで欲しい」

直截な言葉にウイリアムは軽く目を見張る。

「……殿下は」

「うん？」

「殿下なんですねえ」

「なんだいそれは」

ヒューバートは返した。

返したが、心の中では

(なつ、なんだこれ！　何この表情の動きつぱり！？　見たことないんだけど！？)

大慌てだった。

こんなリントンは知らない。知らないリントンを引き出したのはレベッカだろう。

彼女はまるで触媒のようだと思った。  
その存在で反応を引き出す。

そしてウイリアムも知らなかつた。

耳を塞がれたレベッカが、会話を聞かないように気を付けながらも、向き合つた状態のウイリアムの表情だけはじつと見つめていたことを。

またレベッカも知らなかつた。

目の前のウイリアムの表情にいつもと違つものを感じた、その先にある気持ちを。

それは取り繕わないウイリアムの弱さを垣間見た瞬間だったのだが、違和感の原因も、意味も、その時のレベッカには分からなかつた。

## 幕間 ほのりと甘い

「女の子つてこりのは、どうしてああも甘いものが好きなんだらうねえ？」

手のひらの上の小さなお菓子を見ながらヒューバートは言つ。ここは学院棟ではなく、一の階の内側、王城の中の一室である。答えを求めているのか独り言なのか判別のつきにくい言葉ではあつたが、一応同じテーブルについてこることだし、と、それを聞いた男は口を開いた。

「氣を散らしていないでさつきソレに用を通しなさい」

ヒューバートの発言への返事にはなつていない。  
ちなみにソレとはテーブルの上に積まれた書類である。  
実務で政治的感覚は身に付ける、とヒューバートの教育係の一人であり叔父であり文官である男が本日持つてきたものだ。  
銀縁の眼鏡はスバルタの似合いそうないかにも厳格な容貌だが、この男が以前は随分と浮き名を流していたことをヒューバートは知っている。

「甘いものばかり食べているから、本人も甘いんだろうか」

そしてこちらも、まったく返事になつていないのであつた。  
果たして一人に会話する気はあるのかどうか。  
これは少し相手をしないと、身を入れて仕事をしそうにならない、と  
判じた男は小さくため息をつく。

「その菓子を寄越した女性が甘いということか？　あまり大っぴら

「口にしてると醜聞になるわ」

「く？」

ぽかん、と口を開け間の抜けた声を発した後でヒューバートはにやりと笑う。

「さあがですね叔父さん、発想が口口」

「ヒューバート、普通、さすが、と、口には結びつかない」

突っ込みどけるはソノなんだ！ と笑つヒューバートを冷ややかに眺めやると、すぐ口に笑いをおさめてこくりと見る。

「セレニまで艶のある甘い、じゃないよ。それに、醜聞にならぬ類の女性がこんななお菓子を持ち歩くと悪いわ」

そう言つて、かわいらしく包まれた小さなお菓子をつまみ上げて見せた。

「お前、幼女趣味はもつと悪いぞ！」

「……叔父さんの中で私はどうこう人間なの……」

「冗談だ」

「……（ほんとかな……）」

「で？」

「で、って！」

ヒューバートは笑う。

「学院の女の子におすそ分けでもらったんだよ。三つ持つていて、叔父さんにこれからしほられる、って言つたら、つくれた。だからハイ、一つは叔父さんの分」

研究室でのやりとりの後、その場を辞するウイリアムにレベッカが渡したお菓子だ。一体どこに隠し持つているのかと感心したのは秘密だ。

茶化すつもりで自分にもくれないのか、と口にしたら一いつ喝べた。叔父の件は同情をひくというポーズのためだったのだが。自分の分を残そうという気は彼女にはなかつたらしい。

思い出してヒューバートの口はやわらかな笑みをかたちどる。

それを見て男はひょい、と眉を上げた。その拍子に眼鏡が下がり、中指で押し上げる。

「恋人か？」

「まさか。ほかに相手がいる子だよ」

「人のものは良く見えるものだが」

「ハハ。……ああ、そういうところはあるかもしれない」

「ヒュー？」

「ん？」

ぱくり、と包み紙からお菓子を取り出し口に放り込みながらヒューバートは答える。

「（自覚なしが？）いや、なんでもない。これ、あまり見ない菓子だな」

「南方で獲れる巴旦杏の粉を焼いたものだつてよ。プラネタ王国の特産だつて言つてた」

「ほう、そんなバックグラウンドまで理解するような子なのか」

「学院に入学するような子だよ、叔父さん。それにプラネタとは親交の深い家なんだと思うよ。南国の植物を好むので有名な家だから」「サニー家か！」

「（）名答。だからね、私の恋人だなんてありえないよ」

「ああ……なるほど」

サニー家の令嬢が、正式ではないにしろフロスト卿の子息と将来の約束を交わしているところのは一部高官たちの間では有名な話なのだ。

男としては、正式な話でもあるまいし奪つてしまえばいいだけのことではないかとこう考へではあつたが（例え正式な話であつても奪うのが楽しいとこうのが正直なところだ）、口は噤んでおくことにした。

代わりに、会話に出てきた国名に話題を移す。

「プラネタといえど、来月使者が来るぞ。ほら、丁度そここのぞいでいる書類に日程が」

「へえ、そうなの。やつぱり南国の人は真冬には来ないんだねえ」

「余計なことを言つてないで、ほら」

「ちょっと待つて、お茶の一口くらい飲ませてよー」（）のお菓子、結構口の中の水分を持つてく……」

仕方がないな、と男は人を呼んで茶の用意をさせる。

もらつた菓子を自分も口にすると、ほろりと口の中で甘くとけた。この味をヒューバートは、ただ甘さだけを味わつたのか、それとも何か他のものも味わつたのか。

そんなことを考えながら男はカップを手に取つた。

**幕間 まゆりと甘い（後書き）**

お菓子はアーモンドプードルのスノーボールです。  
南国の、雪への憧れ。（作中で）

## 12 赤い髪の魔人

スペインの雨は主に荒野に降る。

そんな言い回しと回じカテゴリにある文章に、

シリカ公国はとても平和である。

というものがある。

どこのがどのよう発音の練習になるのかといつと、  
「シリカスイリツカシルイカスイリカ」

といつ舌をかんだり巻き舌をしてみたりな読み方にあるのだけれど  
「めんなさい嘘をつきました。」

ほらふき男爵の口た話はさておき、シリカ公国が平和であることは  
事実。

そして平和な状態は、何故だか噂話に栄養を与えてよいので。只  
今あちらこちらで噂のお花を咲かせているといひ。

例えば王立学院の一画では …

「聞いたか？」

「聞いた！ オレは美人のチェックは怠らないんだぜ！」

「プラネタ王国の使者様のことよね！ 燃えるような赤い髪に凜と  
した佇まい、女性だけどときめくちやうわー！」

「ちょ、おま、オレというものがありながら」

「たいへんだ、今おれたちは一つのカップルの終焉を見よつとして  
いる……」

「つぬせえ！」

横滑りな会話を繰り広げる面々がいたけれど、要は友好国であるプラネタ王国から来ている使者が注目の的になつてゐるのであつた。それを、ほわわん、といった態で聞いてゐるのはレベッカ。

図書館へ本を返しに行く途中で学友たちに呼び止められ、話を聞かされている。

普段、ちょこまかと動き回つてゐるレベッカをわざわざ引き込んでまで噂話を繰り広げるようなことはほしないのに、なぜなのかしら? と、レベッカが首を傾げていると。

「それでねレベッカ嬢、足を止めてもらつたのは君に聞きたいことがあつたからなんだ」

「そうなの、もしできたら、なんだけど」

少しモジモジしながら学友たちが切り出した。

「聞きたいこと、ですか?」

「一体何を聞きたいのだろう?」

「うん、使者様のことなんだけどね」「使者様の」

「そう」

「なぜ私に? 何か私で答えられることなんてあつたかしら あ!  
! 私の家がプラネタの商家と取引をしているからですか? でも、  
うちは商業的な関わりがあるだけですから外交のことや、まして使  
者様個人のことは分かりませんけれど……」

「うん、でもね。リントン先輩が」

「? ウイリアム様に関係するんですか?」

確かにウイリアム様のお母様の「出身はプラネタだったけれども、それと今回の使者様と関係あるのだろうか？」

「あれ? 聞いてないの?」  
「??」

もはやレベッカには何が何やらさっぱりだ。

クエスチョンマークを頭の上にいくつか浮かべながらレベッカはへにやりと眉尻を下げた。

「ああ、『ごめん』ごめん。今ね、使者様の護衛担当にリントン先輩がついているから話が聞けないかなあとつて」

初耳だ。そうか、そんな重要な役割を担つていてる最中だとは。確かに今週に入つてからウイリアム様に会つていらないな、とレベッカは思った。

「ウイリアム様はお仕事の話を私になさることは殆どありませんから、お役に立てそうにありませんね……『ごめんなさい』

ペコリと頭を下げる。

慌てたのは学友たちのまゝであった。

「わ、こちらが『ごめんだよ！ 困らせたり謝らせたりしたかったわけじゃないんだ」

「ただちょっと、使者様の個人情報が分かつたら嬉しいなあと思つて」

「ふむ、ちなみにどんなことが知りたいのかな」

タイミング良く合いの手が入る。通りの良い女性の声だ。

「誕生日だろ、それから好きなもの苦手なもの、好みの異性のタイプなんてのも分かるといいなあ！」

答えるほつはそのまま指を折って知りたいことを数え上げる。

「……なんだそれは…全く政治的な意味合いが見受けられないな。一体何に使う情報なのかな？」

「各国美女データブックを作るんだよ！ 憧れのあの人はどんな人？ なーんてオビも付けて売れればおこづかい稼ぎになる、かもしれない！ ちなみにリントン先輩のデータは収集済みだぞ、先輩の好みのタイプはもちろんレ、」

そこまで喋ったところで、べしり、と熱く語る人物の顔面に何かが飛んできて、あやしげな事業計画は途中で止められた。  
ぼとり、とその「何か」が足元に落ちる。

「……近衛の制帽……？ つてリントン先輩ー！ と使者様ー！？」

少々口元を引きついでせながらウイリアムが現れた。傍には赤毛の美女を伴つて。

「先輩と呼ばれるからには君たちは私の後輩になるわけだけれど、今、ものすごく無関係のふりをしたいよ私は。あまり山つ氣を出しておかしなことをするのはやめなさい。他の客人がいらしている時期には特に！」

「ふふふ、そう田へじらをたてるようなことでもないでしょう、リンクトン」「フローレ殿」

艶やかに笑う女性にウイリアムはわずかに眉をひそめる。が、彼女は全く気にした様子もなく学生たちに向き合つた。

「たまたま歩いていたら話が聞こえてきたのだけれど、結果的に立ち聞きのような形になってしまい申し訳ない。  
ご存知のようではあるけれども私はフローレ・プラネタ。プラネタから来た親善大使だよ。一応プラネタ王国の第一王女と言う肩書きもあるね。ちなみに、好きなタイプは一途な人だ」

パチン、とウインクをして微笑む。

学生たちはうわあ、と顔を赤らめながら順に自己紹介を始めた。  
それらを横にレベッカは、

(……ヒューバート殿下と話が合いそうなかただわ)

ウインクを見てそんなことを考えていた。

## 12 赤い髪の魔人（後書き）

ところで、ほらふき貴族シリーズとして  
ほらふき公爵・ほらふき侯爵・ほらふき伯爵・ほらふき子爵・ほら  
ふき男爵

と並べた場合に、ほらふき子爵が一番ストイックな感じがしてちょ  
うとウキウキしてしまいます。

ほらをふいている時点でストイックも何もないんですけど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9257p/>

理想のタイプはお義父さま

2011年9月5日09時47分発行